



どんなにつらい現実を
突きつけられても、
妻との絆があったから、
心から尽くせたのです。

高岡教会 中尾清治さん

中尾さんの妻・真夜代さんは長年、脳腫瘍と闘っていた。手術は10回を超え、医師に「もう手術はできない」と告げられた中尾さんは一日24時間、身も心も尽くして最期まで介護した。その間、会社をリストラされても、日に日に弱っていく妻を前にしても、けつて心が折れることはなかった。それは、親身に相談に乗ってくれていた人の「奥さんにあなたのおかげで私が生きがいを持て生活できてありがたい」と伝えなさい」という言葉や、つらい運命を背負ったにもかかわらず、すべてを受けとめ、ひた向きに生きようとしている妻の姿を目にしていたから。愚痴や恨み言を一切言わず、それどころか、何かにつけいつも「清治さん、ありがとう」と逆に励まされていたことに気づいたからだ。「妻のおかげで私は生きがいをもて生活できた」夫として務めを果たした充実感と、いつも妻を近く感じているという安らぎに満ちた中尾さんの顔はすがすがしい。

家族の絆

昨年来、「絆」という言葉をよく見聞きします。一方で、高齢者の孤独死など胸痛む報道にふれるにつけ、家族とは何か、その絆とは何かを考えさせられます。

家族は世の中の縮図であり、いい面もある一方で大家族だとそれだけ煩わしいことが多くなるのも事実です。けれども、その煩わしさが、じつはありがたいのです。

ときには口うるさく感じる祖父母や両親、あるいは宇宙人のように思える子や孫との日常は、自分と違う感覚や異なる世代を理解する訓練であり、そこで味わう煩わしさは人の心を鍛える絶好の材料といえます。また、他人にはいえない苦しい思いを受けとめてくれるのも家族ではないでしょうか。

つまり、家族がお互いに磨きあい、いたわりあって紡いでいく敬愛の糸が「家族の絆」ということです。

立正佼成会